

藤原幸章著

『善導浄土教の研究』

幡谷明

藤原幸章博士は、安井廣度門下の逸材であり、これまで善導教学の研究を畢生の課題として研讀されてきた碩学である。本書は、その古稀を記念して、門下生が発起人となり、著者がこれまで永年にわたって、大谷大学研究年報・大谷学報・親鸞教学等に発表せられてきた数々の優れた業績の中から、主たる研究論文を厳選し集成して、出版せられたものである。

近年における善導教学の研究については、昭和五十五年（一九八〇）入寂千百年を記念して浄土宗の側から種々の研究書が出版せられたが、真宗におけるまとまった研究書としては、僅かに大原性実博士の『善導教学の研究』（一九七四）が挙げられるにとどまり、最近、藤田宏達博士の従来の歴史的・思想的研究を十分に踏まえた優れた仏教学的研究業績である『善導』が出版せられた程度に過ぎない。そのような事情からしても、この度の出版は、学界において久しく待望されてあったものであり、その恩恵を蒙ることは測り知れないものがある。（尚、善導に関する主要文献については、藤田宏達著『善導』巻末の文献案内参照）

本書は、次のように二部によって構成せられている。
I 善導浄土教の諸問題

- (1) 善導と『涅槃経』
- (2) 善導と『起信論』
- (3) 善導浄土教と天台智顛
- (4) 善導浄土教と曇鸞の教学
- (5) 『観念法門』について
- (6) 善導の別時意会通について
- (7) 光台現国論
- (8) 指方立相論

II 善導浄土教と法然・親鸞

- (1) 浄土宗をひらく
- (2) 『選択集』の中心課題
- (3) 親鸞教学と法然教学
- (4) 『観経』理解の立場
- (5) 正定業の論理
- (6) 不廻向論
- (7) 真宗の人間観
- (8) 浄土教実践の問題
- (9) 大行と大信

* (1)の番号は筆者が便宜上付けたもの
枚数制限のため、以下、本書の主部と考えられる第一部の概略についてのみ、順を追って紹介することにしたい。

二

第一部の「善導浄土教の諸問題」に収められた八篇は、内容上、(一)善導における「聖道門」仏教の受容と撰取―(1)(2)(3)、(二)善導における浄土教、殊に道綽を介しての曇鸞教学の伝承―(4)(5)(6)、(三)善導教学の基本的立場―(7)(8)の三節に分けることが可能と考えら

れる。

周知のように、善導は、中国仏教の開花期であり、全盛期でもあった初唐時代に、恰も国際的宗教都市の観を呈していた都長安を中心に活躍した浄土教である。淨影寺慧遠を代表とする当時の聖道門仏教の諸師による浄土教理解乃至批判に対して厳しく対決し、末法五濁の危機感に立脚して凡夫入報の真宗を開顕された古今楷定の宗師であった。浄土教史上における善導は、面授の師である道綽の教学を受容、更にそれを徹底することによって、まさしく純正浄土教を大成するという偉業をなした人として位置付けられている。故に、従来、真宗における善導教学の研究も、主としてその点に焦点を絞って説明がなされてきたといえる。それに対して、著者は、次の二つの視座を提起して、綿密周到な論証を行っている。その一つは、善導は、単に聖道門仏教の批判に終始したのではなく、積極的にそれを受容し、選択摂取することによって、浄土教の独自性を確立したことについて、十分な配慮と考察が必要であるということである。そしていま一つは、善導が、道綽の立場を直伝するとともに、更にそれを介して曇鸞にまで遡り、浄土教の教学としての普遍性を解明したことを究明すべきことの必要性である。この二点は、従来、研究では、望月信亨博士により少しく注意されたところであるが、殆んど注目されることのない点であり、そこに本書のもつ極めて斬進な面期的意義があるといわなければならない。

(一)

先に第一部の内容を、三節に分けたが、(一)の三篇は、主として前者の視点に基づく考察であり、(二)の三篇は、殊に後者の視座に立って論証されたものであり、そして(三)の二篇は、それを踏えて

善導教学の主要問題につき、その独自性を解明されたものといえるであろう。

(一)の(1)「善導と『涅槃経』」では、当時著名な涅槃経の研究者でもあった道綽の弟子として、その講席にも列した善導が、当時汎く流行していた涅槃経乃至涅槃学を、いかに吸収したかを詳細に論述している。殊にそこでは、仏身・仏土論について、善導が『涅槃経』に依って、浄土を極楽無為涅槃界と表現したこと、人間論については、一闍提の徒である阿闍世の入信を通じて偏為凡夫論を確立したこと、および観經疏にみられる顕著な涅槃経的表現(十九例)についての論証がなされている。

(2)の「善導と『起信論』」では、観經疏玄義分序題門冒頭の真如論について、起信論との関係について窺い、帰三宝偈と論の帰敬偈との対応について両者の密接な関係を考察し、そして更に般舟讚後序にみられる、衆生の受生が真如法性と同時であるとする心識・空性同時論について、起信論の根本主題である真妄和合識との関係について論証せられている。

次の(3)「善導浄土教と天台智顛」は、智顛の歿後十数年を距つ善導と智顛の関係について、直接的にそれを証明する文献的資料は存在しないが、弥勒信仰に立つ慧遠よりも、理論的にも実践的にも優れた学匠として、隋室から絶大の信頼を寄せられ、その晩年に弥陀信仰に帰した智顛に対して、善導はより深い親近感を抱いたであろうという推測のもとに、両者の関係について、次の諸点にわたって論述している。すなわち、智顛の制定した天台実践部門と、善導が浄土教の実践部門について明らかにした具疏との関係について、(i)法事讚と法華三昧儀儀、敬礼法との対応、(ii)往生礼讚の五悔と天台の法華三昧との対応、(iii)般舟讚の般舟三昧と

智頭の常行三昧との関係、(iv)観念法門と常行三昧との関係等について論証、善導による念仏の実修行法についての規定、殊に五正行中の読誦・観察・礼拝・讚嘆供養の助業、あるいは懺悔・行道等、智頭の実践行法を浄土教的に受容したものとみられることを刻明に究明せられている。これらの点に関しては、これまでにも望月信亨、矢吹慶輝博士等によって部分的には注意されてきたところであるが、善導教学の全般にわたってそれを詳細に論証されたのは、本書をもって嚆矢とするというべきである。それは実在善導の教学に精通することは勿論、当時の中国仏教全般について熟知することによってのみ、始めてなし得るところであり、優れた研究業績として高く評価されるべきものである。

(⇒) 三篇は、(4)「善導浄土教と曇鸞の教学」の冒頭に示された善導と道綽の関係について、次の三点を挙げることを中心に展開されたものである。すなわち、第一には、道綽の痛切な時機の考察に基づく聖浄二門論という実践的立場を全面的に受容伝承したこと、第二には道綽教学において残された問題である要弘二門論、助正論、九品論、別時意会通論、称名正定業論等の重要教義について、更にそれを徹底し究明したこと、第三にはその点において、道綽教学の背景である曇鸞の教学、殊に阿弥陀の本願力増上縁を中核とする浄土教に基づき、それに依って、本願為宗という根本的立場を確認し、観経解釈に関するすべての諸問題を解く最高の権威を、ただ阿弥陀仏の願意に聞くという一点に求めるに至ったという、以上の三点である。

(4)「善導浄土教と曇鸞の教学」は、殊にその第三の問題である善導における曇鸞教学の受容について、善導の九品人間論と曇鸞

の論註上巻末の八番問答に展開された衆生論との関係を論じ、次いで実践論である念仏論について、(i)論註上巻冒頭の名号経体論と、念仏三昧為宗論の密接な対応性を注目、(ii)そこから演繹される別時意論(これについては後の(6)にも詳説されている)、(iii)八番問答の十念釈と名号論の対応、(iv)善導の五念門論における諸問題について、そこに曇鸞教学の受容と徹底の意義を詳説せられている。そして更に仏身仏土論について、曇鸞と善導の両者が同一の経論を解釈した、(i)法界身釈、(ii)二乗種不生論、(iii)逆誘除取論の重要問題である三点について論証し、善導教学は、師の道綽を介して値遇することが出来た曇鸞教学の本質をもって、観経解釈のための決定的基盤としたことを明証されている。

(5)「観念法門」については、善導の著作である五部九巻の中、古来、「行門中の教門」を明らかにするものとして、極めて独自の構造をもち、特異な地位を占める観念法門一卷について、従来の諸説を検討した上で、その本質的性格と、善導疏全体において占める位置について綿密詳細に論証せられたものである。すなわち、まず(i)望月博士による観念法門一卷と、五種増上縁義一卷との合綴説について検討し、本書は内容的に一部一卷の書として整ったものであることを論証、そこから(ii)本書と具疏の関係について、従来の善導教学研究においては、本疏に重点が置かれる他面、とかく軽視されがちであった具疏の重要性を指摘し、具疏の中でも本書は四帖疏の成立に先行する前提的著作とみるべきであること、すなわち、若き求道時代の善導が、道綽直伝の思想信仰を頭わした、善導初期の著作であり、まさしく安樂集領解の書であることを主張せられている。本書は、念仏観仏両三昧についての善導自身の実践的動行を主題とする著作であることは、周知

のところであるが、(四)本書の念仏三昧は、称名念仏を本質とする四帖疏の念仏三昧論とは異り、観仏三昧経及び般舟三昧経、殊に後者に基づく定心念仏三昧であり、観仏三昧と分たれないものである点を指摘される。但、しかし、安樂集及び本書は、ともに観經そのものを直接積極的に表面に出すことなく、諸經典に依って念觀未分の形をとりながら、そこに観仏三昧から(称名)念仏三昧への方向を指し示していることに深く留意すべきことを注意せられている。(五)そして更に、五種増上縁功德分について、そこに引用、列名されている諸經典は、全面的に安樂集に依ることを注目し、本書は、善導の意識的な安樂集相伝を示すものであることを論証せられている。

(6)「善導の別時意会通について」——曇鸞との関連——では、当時、撰論学派から提起され、そのため、浄土教が存亡の危機に陥つたとまでいわれる別時意論に対する善導の会通は、道綽の会通を継承・徹底したものとみるのが、これまでの一般的な理解であるが、それは外部的形式的なものであって、善導が本質的根本上に受容したのは曇鸞の教学そのものであったという、新たな見解を提出し、そのことが明確に論証せられている。すなわち、道綽の会通は撰大乘論の四意説では別義意に当る宿善論に立っての答釈であり、その宿善そのものについての吟味は不充分といわねばならないものであって、それが徹底して宿業の自覚に立った善導にそのまま受容せられたとは考えられないとして、そこに曇鸞教学の影響の重大性を認証すべきことを究明する。善導は観經の十声称仏の経説について往生別時意論に答えるが、その根本的立場は、曇鸞が論註において開顯した阿弥陀如来の本願力を本質とし増上縁とする真実願生道にあり、それによって願行具足必得往生論を

展開することにある。それが阿弥陀仏の本願を本質とする善導の六字釈であるが、それと関連する玄義分釈名門に示された独自の経題釈も、曇鸞の論註に示された経題釈に基づくものである。そして更に剋実というなら、仏願力に縁る皆得往生を断言する善導の答釈は、論註が上巻冒頭の難易二道論、上巻末の八番問答、下巻末の要求其本釈において、最も本質的体系的に論証し開顯した他力釈に依るものであることが強調せられている。そしてそこから、この論のみでなく、善導と曇鸞の教学との関係についての論放である(4)(5)(6)三篇の結論として、親鸞が唯念仏の師教の背後に善導一師を発見し、そこから更に曇鸞に値遇して、師教の真精神を開顯すべく、唯念仏の本質が大悲廻向行そのものであることを顕示するに至ったのも、そのもとは全く善導の曇鸞相承という一事に淵源すると指摘せられている。それが、本書の第二部善導浄土教と法然・親鸞の基調をなすものであり、ここでは第一部において、善導を軸に展開せられた論証が、法然・親鸞を軸として詳細に展開せられることとなっている。

(三) (四)の二篇は、主として善導教学の独自性について論証せられたものであり、(7)「光台現国論」は、親鸞の観經和讃第一首に窺われるように、広開浄土門という決定的出来事を頭とするとして、観經一部の喉衿になるものである。韋提の見仏得忍を説く観經一部を集約する、重要な位置を占める光台現国の仏意を、どのようにに了解すべきか、それを西山派祖証空の観門開會論といわれる独自の観經理解と、親鸞の頭彰隱密論と呼ばれる透徹した観經領解に基づいて、詳細に論述されている。西山派証空に関しては、著者に『観經疏大意講説』という優れた研究業績があり、本書の第

二部(8)「浄土教の実践の問題」にも主題的に関説せられているところであって、まさしく著者の独壇場というべきものである。西山派証空の立場は、観経の定散法を、自力行門としての定散法と、弘願他力観照の法門としてのそれに分け、行門から観門に入り、観門によって弘願に帰することが、定散開説の仏意に随順する所以であることを説明することにあるが、その証明となるものが、韋提の回心の事実を記録した光台現土論である。すなわち証空は自力の行門に破綻し回心した韋提によって領解せられた定散を、他力観門の定散とし、観門(能詮・弘願(所詮)は諸経(教)諸善等を融会統撰するものであり、定散諸行のすべてが弘願の顕現であるという見解に立って、自力・他力、行門・観門等の別は全く心の開・不開に因るものとみる。そこから、観経における韋提の救済は、すでに序分の光台現国において充全しており、それ以下の正宗分、殊に華座観は、仏滅後の未来世の一切衆生の為に、それを再現し再説したものであるという、徹底した光台独立論まで積極的に主張されるに至っている。著者はそのような証空の見解について詳細に論述した上で、そこから親鸞の隠頭積の独自性について論証を展開されている。親鸞の隠頭積は、善導によって提起せられ、法然において徹底せられた定散の諸行と念仏についての廃立積に基づくものであり、それを行の内面における信心の純・不純について決定するものである。その関係は、廃立積が、主として経の流通分に基づいて、要弘二門錯綜の観経から選択本願為宗の大経への方向を指示するのに対し、隠頭積は、その結論を承けながら、逆に経の序分に立って大経の本願為宗の立場を観経全巻の上に確認するものであり、それによって廃捨された定散諸行の方便としての積極的な意義を明確化したものである。その

親鸞の隠頭積が光台現国論を重視することは、教行信証化身土巻の教証を始めとして、浄土文類聚鈔、愚禿鈔、観経和讃等、観経に言及せる著作のすべてにおいて注目されていることによつて明白であり、そこから韋提の見仏得忍も華座観や流通分をまたず、すでにそこにおいて見出されたという領解も充分成立つことがいわれる。廃立積と隠頭積に関しては、本書の第二部(4)『観経』理解の立場においても詳説されているが、本論文では、前上の証空と親鸞の独自の解釈を通して、法然門下において両師のみが光台現国論を重視せられた共通性を指摘するとともに、問題を観経一部に限定して、証空は観門大経の弘願に基づく開會論に立脚して、正宗分の二重性を指摘し、親鸞は信心の純・不純に由つて、一經全体に及ぶ真仮の二重性を説明するという相違点のあることを結論付けている。

そして、第一部の結びに置かれた(8)「指方立相論」では観経第八像観に説かれた法界身論について、曇鸞、善導の解釈について論述し、教行信証信巻にそれを略抄した親鸞の思想について一瞥した上で、道綽・善導・曇鸞の指方立相論について、その特質と伝統について明快に論述されている。

三

最初に断つたように、枚数の都合上、本書の第一部の内容についてのみ、至つて粗雑な領解と、稚拙な文章でもって、その概略を紹介してきたが、本書は、極めて綿密周到な論証と、透明適確な文章表現でもって、浄土教史上において決定的な意義をもつ善導浄土教の重要問題について、余すところなく解明された優れた研究業績であり、学界に裨益するところ極めて多大である。紙上を借りて、多年にわたるその御労苦を偲び、学恩に対して甚深の

謝意を表するものである。浅学非才の分を顧みず、一・二御教示を仰ぎたい点を敢て申し添えることが許されるなら、冒頭に当時の仏教界の情勢と善導についての概略が述べられてあれば、(一)の善導における「聖道門」仏教の受容と撰取の意義が、いっそう明確になったのではなからうか、そしてそれとともに、ここに採りあげられた涅槃経・起信論・天台以外にも、例えば当時、玄奘三蔵によって将来、紹介された唯識思想との関係など尚究明されるべき問題のあることが知られるのではなかったかと思われる。そして、善導がいかに当時の仏教界と対決しそれを厳しく批判したか、著者の博識と緻密な論証によって説明して頂ければ、この上なき幸甚である。

それと今一つ、善導が道綽の思想信仰を直伝しつつ、曇鸞に遡

って浄土教を教学的に根拠付けたことの指摘、論証に啓発される
ところ多大であるが、その際、道綽について要弘菴舎、念観末分
という従来から与えられてきた評価について、それを今一度洗い
直し綿密に再検討する必要があるのではなからうかと考えるもの
である。例えば、道綽の宿善論、念仏三昧論等、そこには言外に
隠された深い意味がこめられており、それは安樂集全体において
顕わされているものとみられる。そのためには、本書において展
開せられた方法論に基づき、それが道綽に即してなされるべきで
あろう。しかしながら、それらの問題は、本書の学問的価値を少
しも損減するものではなく、あくまでも、未熟な末学の望蜀に過
ぎないものであることを、ここに断っておきたい。

(昭和六十年一月三十日・法蔵館刊・A5版・四一八頁)